

寄稿

九州次世代日韓文化交流セミナー

次世代担う若者 国境越え活発交流

リハビリテーション学科理学療法学専攻 申 敏哲教授

本学と尚絅大学が主催し九州韓国人会が協賛する「九州次世代日韓文化交流セミナー（日韓文化学生交流会）」が、12月21日（日）、熊本市北区の尚絅大学武蔵ヶ丘キャンパスで開催された。本学をはじめ、尚絅大学、尚絅短期大学、熊本大学、東海大学、熊本県立大学、熊本歯科技術専門学校から約30人の学生が参加し、終日、活発に交流した。

同セミナーは、私（申）と尚絅大学こども教育学科の鄭英美教授が中心となって初めて企画・運営。本学と尚絅大学「子供教育・文化交流サークル」の学生が主体となり、企画準備から当日の運営までを担った。

会場では、韓国料理体験や食事を通じた交流に加え、韓服と着物の体験、さらに「『日韓の文化』について楽しく語ろう♪」というテーマのセミナーも実施された。セミナーでは、日本と韓国の学生がそれぞれの国の文化的な違いについてディスカッションを行い、日常生活や価値観、習慣に関する疑問、各国の良い点や改善すべき点、

不便に感じる点などについて率直な意見交換を行った。また、韓国の伝統ゲームなどの体験プログラムも取り入れられ、参加した学生たちは楽しみながら日韓の文化に触れる貴重な時間を共有した。

参加者からは「とても楽しかった」「ぜひ次回も参加したい」「他大学の学生と仲良くなれた」といった声が多く寄せられ、満足度の高いプログラムであったことがうかがえる。今回のセミナーは国の予算を活用して実施された初回の試みであったが、その成果を踏まえ、今後も継続的に開催していく予定である。

今後は、より多くの学生が参加できるよう規模を拡大し、熊本県内にとどまらず、九州全体を視野に入れた「九州日韓文化交流プログラム」へと発展させていく構想も進められている。本セミナーをきっかけに生まれた学生同士のつながりを大切にしながら、次世代を担う若者たちが国境を越えて交流し、相互理解を深めていく場として、今後の展開が期待されている。



写真左は、九州次世代日韓文化交流セミナーの参加者。国旗には交流会の感想や参加者の思いが書かれました。同右は、韓国の伝統衣装・韓服（ハンボク）の体験をした学生たち

小雨の中、遠方からの受験者も

認定看護師教育課程（脳卒中看護分野、認知症看護分野）、特定行為研修課程の入学試験を10日（土）に実施しました。年明け最初の入試となります。各課程とも開設している大学が少ないことから、遠方からの出願もありました。

認定看護師教育課程・ 特定行為研修課程入試

りました。早朝は小雨がぱらつくあいにくの天気でしたが、試験開始前には青空が広がり、欠席・体調不良者も出ることなく無事終了しました。合格者は、20日（火）に発表されます。

職場におけるコミュニケーションの活性化や業務効率化などを目的に職員有志で構成された、「クマホの未来創造チーム」による成果報告会が、12月24日（水）キャンパステラスのコロシアムで開催されました。

報告会では、チーム立ち上げの経緯や活動目的、実施体制など、結成から1年間の活動が詳しく説明され、メンバーで出し合った本学の課題や気づきが85個にも上ったこと、職員の軽装勤務や勉強会の導入など12項目に取り組んできしたこと、今後は勉強会を軸とした活動へ転換することなどが報告されました。

その後、7人のメンバーが、活動を通しての感想を一人一人発表。「正解を見つけるのではなく、疑問を見つけることの大切さを知った」「新しいことを始めるの大変さを実感した」「忙しい中でも、部署を越えて協力し合えたことが良かった」などと

話しました。

最後に同チームの全体統括である河瀬晴夫事務局長が「自発的に、自分事と捉えて取り組んでくれたことに感謝している」と感謝の思いが伝え、参加者たちから労いの拍手が送られました（NL編集部）



活動を振り返り、1人ずつ感想を語る「クマホの未来創造チーム」のメンバー

賢い食べ方で「メタボ」にブレーキを！

ここからだの
健康づくり研修会

衛生委員会による「ここからだの健康づくり研修会」が12月26日（金）、50周年記念館で開かれ、日本赤十字社熊本健康管理センターの管理栄養士・嶋田けい氏が「カロリーよりもバランス！賢い食べ方でメタボにブレーキ」と題して、教職員を前に講演しました。

嶋田氏は、本学教職員の検診結果と同センターの平均検診結果を見比べながら、教

職員たちの傾向と特に気をつけてほしい検査項目を説明。年末年始を迎える前だからこそ知っておいてほしい食事のバランスや適切な飲酒量についても解説しました。また、自分に合った食事量について解説する場面では、参加者たちが自分の検診結果を見つづ、適正エネルギーを計算する様子も見られ、終始熱心に話を聞いていました。（NL編集部）

私の秘話
ヒストリー

内部監査室

濱本 高義室長



驚きと感動のファシリティドッグ

およそ10年前、大学病院に入院していた時に、私はファシリティドッグという犬の存在を知りました。その時に、私は大きな驚きと同時に深い感動を覚えたことを記憶しています。当初は一般的な「セラピードッグ」のイメージを抱いていましたが、その実態は全く異なる専門的なものでした。

最も驚かされたのは、彼らが特定の病院に「常勤」し、医師や看護師と連携し、医療チームの一員として明確な役割を担っている点です。単なる患者の「癒し」だけの犬ではなく、治療のプロセスそのものに深く関与していました。例えば、手術室に入る直前まで付き添い、不安で泣き叫ぶ子どもの心を落ち着かせたり、リハビリーションのセッションでモチベーションを高める手助けをしたりします。また、痛みを伴う処置の最中に寄り添い、子どもたちが感じる恐怖やストレスを軽減させ、家族にとっても精神的な支えとなる役割も果たします。

彼らが生後すぐに専門的なトレーニングを受け、医療現場という特殊な環境に適応できるよう育成されていることも衝撃的でした。ユニフォームを着用し、衛生面にも配慮された彼らの存在は、従来の動物介在活動の枠を遥かに超えています。

ファシリティドッグの活動は、恐怖や不安でいっぱいの病院生活を送る子どもたちにとって、どれほど大きな心の支えになっていることでしょうか。彼らと医療がこれほど深く連携し、具体的な治療効果を生み出している事実に、動物が持つ力の可能性と、福祉・医療分野における新たなアプローチの重要性を強く感じ、心が温かくなりました。

今後、専門的なエビデンスの蓄積と制度整備が進むことで、より多くの医療機関での導入が期待されています。日本においても複数の団体がファシリティドッグの育成と医療機関への導入に取り組んでいます。

週間行事予定（1月19日～1月26日）

1/22（木）～30（金）

後期定期試験 ※30日は予備日